

ポスト冷戦時代における暴力の表象

——オキナワとフクシマからの問い——

朱 恵足

1990年前後にバブルがはじけて、日本は「失われた20年」と呼ばれる経済衰退の時代に入った。2011年3月11日に起きた東日本大震災と福島第一原子力発電所事故によって、日本はすでに「失われた30年」めに入ったという見方も示された。しかし、ポスト311の日本の行方について考える際に、日本の「失われた20年」は、1989年にソ連が崩壊し、米（民主）ソ（共産）陣営がお互いに対峙し、競合するという構図が崩れ、世界全体がポスト冷戦の時代に入った時期でもある、ということを出し出す必要がある。「冷戦」の時期には、朝鮮戦争、ベトナム戦争など、アメリカがアジアの政治に介入した戦争や紛争が後を絶たなかった。それと同じように、冷戦が終結したといえども、アメリカは湾岸戦争、イラク戦争などで、中東諸国を新たな敵に仕立て上げ、その軍国—資本主義的なヘゲモニーを維持してきた¹。日本では、冷戦の終結と経済の衰退は、日米安保と経済発展という日本の「戦後」を大きく規定した二つの方針を揺るがすどころか、アメリカに追従するかたちで、右翼ナショナリズムと軍国主義の勃興に、経済の破綻から生じた不満や矛盾のはけ口を求めた。

本稿は、沖縄の米軍基地と福島原子力発電所事故をテーマにする目取真俊『眼の奥の森』（2009）と津島祐子『ヤマネコ・ドーム』（2013）を取り上げ、暴力をめぐる文学的な表象が、日本の「戦後」や「冷戦」をたどり直すことを通していかに、現在に持続するアメリカの軍国—資本主義を批判するのかを考える。沖縄の米軍基地と福島原発事故を同じ問題系として取り上げる論考がある²。本稿は、戦後の日本における米軍基地と原発を、歴史的、政治的な連続性を持つものとして位置づけ、二つの小説を論じたい。戦後の日本は、日米安保という「核の傘」の下、米軍基地を沖縄に集中させたうえで、日本本土は原発を国策として推進し、経済発展にひたすら走った。そして、平和憲法の下で、新帝国主義としてアジアのほかの国に経済進出しながら、原発で潜在的な核軍事力を維持してきた³。2011年福島原発事故が発生した後、日本の政治家は、原発で核ポテンシャルを保ち、そのうえで核武装を擁護するなど、抑圧された軍国主義的な欲

1 Kuang-hsing Chen, *Asia as Method: Toward Deimperialization* (Durham and London: Duke University Press), pp. 181–184.

2 沖縄の米軍基地と福島原発事故を同じ問題系として取り上げる以下の論考を参照されたい。徐京植・韓洪九・高橋哲哉『フクシマ以後の思想をもとめて——日韓の原発・基地・歴史を歩く』平凡社、2014年。高橋哲哉『犠牲のシステム——福島・沖縄』集英社新書、2012年。

3 山岡淳一郎『原発と権力』ちくま新書、2011年。

望をさらけ出し、ついには実質的な武装化を図る平和安全法制を成立させるように至った。

二つの小説はそれぞれ、9・11事件（アメリカ同時多発テロ事件）と3・11事故（福島第一原発事故）の後に書かれたものであるが、戦争末期や戦後初期のアメリカ軍占領に関連する一つの事件がトラウマとなって、半世紀にわたって登場人物に付きまとう、という共通の構図を持つ。最近のトラウマ（心的外傷）研究では、今までの理論に見られる欧米中心主義や、フロイトに対する執着が反省されているが、フロイトが16世紀のイタリアの叙事詩人トルクァト・タッソの『エルサレム解放』に出るタンクレーディとクロリンダの物語⁴に基づいて理論化したトラウマの特徴は、文学における歴史、記憶、語りの関係を考えるにあたって、示唆に富むものだと思う。本稿は、二つの日本語の小説を通し、トラウマの文学的表象が、いかにして第二次世界大戦と戦後との間や沖縄と日本本土との間、そして原爆と原発との間に隠蔽されてきた時間的、空間的、政治的な連続性を可視化するのかを分析し、それによってポスト3・11の日本からどのような問題提起や思想を発信できるのかを考えたい。

1. 終わらない戦争——目取真俊『眼の奥の森』

目取真俊『眼の奥の森』は、沖縄戦の末期、沖縄北部にある離島（伊江島と思われる）が舞台である。海辺で、若い米兵4人によって小夜子という若い女性が輪姦された。犯行に及んだ米兵はその後も集落を襲い、地元の男性の前で女性に暴行した。小夜子に思いを寄せていた盛治という少年は、鉾一本で米兵に立ち向かい、一人の米兵を負傷させた。その後、盛治は、隠れていた洞窟で米兵に投げ込まれたガス弾によって失明した。

この小説は、事件の経緯を描く第1章を除いて、全編、当事者や関係者たちが事件やその後を回想した語りで織り成される。盛治、負傷した米兵のほか、盛治が潜伏した場所を米軍に密告した区長、通訳をつとめた沖縄系2世の米兵、事件の現場に居合わせた久子（南部からの疎開者）、フミ（島の子供）、小夜子の妹タミコなどである。関係者による語りは、事件の全体像をつなぎ合わせる断片になるが、様々な時点、人称、角度や状況によって行われ、「真実」の一部しか呈示しない。お互いに照らし合わせれば、それぞれ意識的に隠蔽し、あるいは無意識的に抑圧した部分があることがわかる。だが、60年前のあの事件は、トラウマになって関係者の戦後につきまとう、という共通性をもつ。

4 「主人公タンクレーディは、恋人クロリンダが敵方の騎士の甲冑をつけていたため、戦の場でそれと露知らずに恋人を殺してしまった。彼女を埋葬したあとで、タンクレーディは十字軍の軍勢を脅えさせている不気味な魔の森へ入っていく。森の中で、彼は一本の高い木に斬りつける。すると、木の傷口から血が流れ出て、この木に魂が呪縛されていたクロリンダの声が漏れ、またしても恋人を傷つけたとうたえるのである。」（キャシー・カルース『トラウマ・歴史・物語』下河辺美知子訳、みすず書房、2005年、4頁）

キャシー・カルースは、フロイドの説に基づいて、トラウマを以下のように定義する。トラウマは、「突然の破壊的出来事を経験して圧倒された状況を指す」もので、「その出来事を意図せぬかたちで再演するとき立ち現われる。そして、体験者はその出来事から離脱できなくなるのである」。たいていの場合、トラウマは事件の発生時に現れるのではなく、「問題の出来事に対する反応は後になってから現われ、その症状として、幻覚やその他の現象が繰り返し人の精神に割り込んできて、本人には制御できなくなる」⁵。『眼の奥の森』で、犯行を犯した米兵の一人は、繰り返される悪夢に悩まされる。彼は最初に犯行を止めようとしたが、仲間はずれされるのを恐れて、見せかけの動きをした。だが、小夜子が見つめていた「血の塊のよう」な「真っ赤に熟れた実」を見た瞬間、「残忍な気持ちが体の奥から全身に広が」り、小夜子に暴力を加える⁶。盛治に刺された後、南部の戦場に送られず本国に送還された彼は、幸運に生き残ったが、戦後、「血の塊のよう」な「真っ赤に熟れた実」や、小夜子やその赤ちゃん、自分を刺した鉾などのイメージが出てくる夢に魘^{うな}される。また、間接的な関係者である区長、タミコや沖縄人2世も、戦争体験の聞き取り、講演や表彰によって、封印された記憶が引き出される。区長の例では、60年前に島の人々から投げられ、背中に当たった石が実際に現われ、戦争体験の聞き取りでそのことを隠した区長を倒れさす。トラウマは、当事者に物理的な働きをするほど、生々しさや圧迫感をもって、60年後の現実に入侵するような存在として描かれる。

小説の各章では、一人の関係者が中心になってそのトラウマを語る構造になっているが、事件の被害者である小夜子の語りだけが欠如している。狂気に陥った小夜子が発する泣き声や叫び声は語りにならず、物語の真ん中にアポリアを作り出し、トラウマを表現することの不可能性 (unrepresentability) を示す。彼女のトラウマは、複数の目撃者の語りにおいて、身体表現として現前する。もっとも強烈的なかたちでそれを表すのが、沖縄人2世の通訳兵の語りなのだ。彼は、60年前の沖縄戦で、ウチナーグチの放送でたくさん住民を救ったことで、沖縄県から表彰されるという連絡を受けた。彼は表彰を断る手紙のなかで、事件の後、彼が米兵少尉とともに小夜子の家に調査しに行った時、自分たちの姿を見た小夜子の様子を以下のように回想した。

何度も悲鳴を上げ、首筋や肩、胸などを掻きむしりました。着物がはだけ、胸が露わになると、その胸に爪を立て、斜めに走る赤い線から血が広がっていきました。帯がほどけて着物が下に落ち、少女は陰毛を掻きむしるようにして両手で性器を傷つけ、私たちを見たまま悲鳴を上げ続けました。⁷

5 キャシー・カルース『トラウマ・歴史・物語』、17頁。

6 目取真俊『眼の奥の森』、147頁。

7 目取真俊『眼の奥の森』、影書房、2009年、213頁。

米兵の姿を見た小夜子が、悲鳴を上げ、自らの身体に傷つけるという設定は、輪姦事件を再演させ、反復させることになる。それは、突然の破壊的「出来事を意図せぬかたちで再演する」というタンクレーディの行為を思い出させる。だが、タンクレーディは知らないまま愛する恋人を2度も傷つける加害者であるのに対して、小夜子は米兵の意図的な犯罪行為による被害者なのだ。その意味では、小夜子のトラウマは、被害者のクロリンドの「傷の中から叫ぶ人間の声」⁸にさえならず、悲鳴を上げたり、自ら被害を反復したりする強迫行為によってしか現前できないのだ。それを目の当たりにした通訳兵は、自分が沖縄出身だが、一人の米兵であることに変わりはないということを思い知らされた。

さらに、作者は小夜子の事件というトラウマを何回も「再演」させることによって、「基地のなかの町」になった沖縄の「戦後」を問題化する。戦後、沖縄戦に上陸した米軍はそのまま居座り、極東最大の米軍基地を作った。1995年に小学4年生の少女が3人の米海兵隊員にレイプされた事件で、激しい反米軍基地運動が起こった。『眼の奥の森』では、小夜子の妹のタミコは、学生の前で戦争体験やお姉さんのことを話した後、バスに乗ってお姉さんのいる施設に向かう途中、米軍基地を通った。米軍の姿を見ないように下を向いた。小夜子が南部の施設に入れられたのも、比較的米兵の姿を見ないですむという理由による。1995年に起きた小学生レイプ事件は何回も言及され、「沖縄は何も変わっていない」と複数の登場人物に語らせる。

タミコの語りは、同級生にいじめられた女の子の語りと交錯し、沖縄の「戦後」に隠蔽されたもう一つの暴力をあばく。タミコの話をもっと前列で聞いた女の子は、同級生からのいじめに苦しんでいる。「平和」教育が行われる学校の現場にいじめが起きているし、そのすぐ外に米軍基地が広がる。いじめは、表面的には平和を装いながら、弱者に陰湿な集団的な暴力を加え、トラウマ体験を生み出す。それは、日本とアメリカとの共犯関係の下で米軍基地を押し付けられた沖縄の現状のアレゴリーとして、「平和日本」や「日米安保」に隠蔽された暴力を可視化する。

それに関連し、小説では盛治が使った銚で作られたペンダントが沖縄に舞い戻った経緯をたどり、負傷した米兵のその後の人生を通して、アメリカの「戦後」を批判する。トラウマに苦しめられた彼はアルコールに溺れ、五十代で運転していた車が崖から転落する事故で亡くなった。その息子は志願して海兵隊に入り、ベトナム戦争に参加した。孫のJは9・11事件に巻きこまれ亡くなった。米兵個人の家族の歴史は、アメリカ新帝国主義の系譜を沿ったものなのだ。東京に生まれ育ったMという男性は、Jの死に対して以下のようにコメントする。

Jの死は残念だけど、俺には9・11のあの事件が、やはり完全には否定できないんだな。無差別テロはいけないとか、暴力の連鎖は許されないとか、そんなきれいな

8 キャシー・カルース『トラウマ・歴史・物語』下河辺美知子訳、5頁。

事を言ってもしょうがないだろうという気がしてね。日本という豊かな国に住んでいて、アメリカさんに頼って平和を享受している俺たちが何を言ったって、世界中のあちこちで第二、第三の9・11を起こそうと狙っている連中には何の意味もないだろう。⁹

東京生まれ育ちのMのコメントによって、米軍基地は「沖縄問題」にとどまらず、日米安保でアメリカの軍国主義に加担してきた日本という国家全体の問題として位置づけられる。9・11事件は、ポスト冷戦の時代におけるアメリカの暴力が生み出した「テロリズムへの戦争」を象徴する出来事である。冷戦の終結により共産主義という「外部」がなくなった後、国境を越えた軍国—資本主義は、制限ない拡張を遂げ、国家の権力や人種、性、階級的な差別をさらに強化してきた¹⁰。そのような時代背景で発表された『眼の奥の森』は、沖縄戦から現在に持続する沖縄の米軍基地をとおして、ポスト冷戦の時代に続くアメリカ軍国主義の暴力に、日本がいかに加担したのかを問題提起するのだ。

そして、2011年3月11日に福島原発事故が起こった。日本だけではなく、世界中が大きく揺れた。原発は「安くてきれいな」エネルギーとして宣伝されてきたが、その安全神話が崩れ、各国では代替エネルギーの開発など原発政策の見直しがなされた。ポスト冷戦の時代は、冷戦期における過度開発や戦争が続き、環境汚染、資源枯渇などの環境問題が深刻化しつつある時代でもある。次に、津島祐子の『ヤマネコ・ドーム』を取り上げ、原発事故がいかに関の「敗戦後」をたどり直すきっかけになり、世界の「戦後」に隠蔽された暴力について問題提起するのかを論じる。

2. 繰り返されるトラウマ——津島祐子『ヤマネコ・ドーム』

津島祐子『ヤマネコ・ドーム』は、戦後、ある施設に収容された占領軍の米兵と日本人女性の混血児の孤児をめぐる話である。ある日、混血児が施設の近くにあるヨン子（依子）の家に遊びに行ったが、ミキちゃんという女の子が池で溺れたという事件が起きた。すぐそばにター坊という近くに住む母子家庭の子がいて、ヨン子、カズ（和夫）、ミッチ（道夫）3人が水音を聞いて、ミキちゃんが落ちた後にオレンジ色のスカートが水面に広がる場面を目撃した。事件の後、混血児のカズとミッチが疑われ、イギリスへと送られたが、2年で日本に舞い戻ってくる。その後、近所でオレンジ色を身につけた女性が殺される事件が、ター坊が51歳の時自殺するまで、ほぼ10年おきに、5回に及

9 目取真俊『眼の奥の森』、138頁。

10 Masao Miyoshi, 2005, "A Borderless World? From Colonialism to Transnationalism and the Decline of the Nation-State," *Global/Local: Cultural Production and the Transnational Imaginary* (Durham and London: Duke University Press), p78-106.

んで繰り返された。3年後、アメリカで911事件が発生した2001年に、カズが庭師の仕事をしていた最中、木から落ちて重傷を負い、亡くなった。小説の最後は、福島原発事故が起こり、海外から戻ってきたミッチが、ヨン子と一緒にター坊の老母を救い出す場面で終わる。

小説のなかで、カズ、ミッチやほかのGIベイビー、ヨン子、ター坊母子などの人生の遭遇が、複数の視点から語られる。それと同時に、2011年の震災と原発事故を冒頭と結部に置き、キング牧師の演説から、アメリカ同時多発テロまで、世界に起きた様々な事件が、同時代の出来事として語りに出てくる。昏睡中のカズがヨン子に話すと想定される語りで、「真夏の朝はきれいだけど、ひとを殺すこともある。広島原爆だって、真夏の朝に落とされたんだ」と広島原爆が引き合いに出される。ミキちゃんの事件を中心に転回するGIベイビーや日本人母子家庭の話は、東京を舞台とするが、日本の「戦後」は、広島・長崎に原爆を投下した米軍による占領から始まったということを出させる。

小説の表紙は、アメリカの核試験による放射性物質が封じ込められているマーシャル諸島のルニット・ドームである。作者はインタビューでそれに触れながら、福島事故以降、「日本では敗戦後に蓋をされていた巨大な時間が一気に吹き出てきた感があり」、日本の「敗戦後の時間をたどり直す」試みとして、この小説を書いたと述べる¹¹。池の水面に広がるミキちゃんのスカートのオレンジ色は、目撃者につきまとうトラウマを視覚的に象徴する。繰り返して現前するその場面は、トラウマの反復する強迫性を表現する。また『眼の奥の森』と同じように、『ヤマネコ・ドーム』も非物語的なモード(non-narrative mode)をとおして、ター坊の語りえぬトラウマを現前させる。最後の場面で、ミッチとヨン子がター坊の母を訪ね、ミッチは「放射能の煮ごり」のなかで、声に出さずにター坊の母に話しかける。お母さんのかすかな、震える声が、「耳に届く声ではなく、ミッチの眼に直接、射しこむ声として」戻ってくる。そして、死んだター坊のすすり泣く声が漏れてくる。木村朗子はこの場面を取り上げ、ター坊に手を差し延べることができなかった悔いは、「なぜ原発事故を起こさせてしまったのだろう、なぜ起こるまで放っておいたのだろう」という悔いと重なりあう」と分析する。アメリカの核実験を始め、世界における「核の罪」を背景とするこの小説を、原発の問題を日本だけの問題ではなく世界の問題として提示し、「世界へ向けて発信」し、共振できるような震災後文学であると位置づける¹²。

日本におけるポスト・フクシマの問題は、原発の問題にとどまらない。日本は世界唯一、原爆の被害を受けた国であるが、戦後、公職追放が解除された元戦犯が密接に関わるかたちで、アメリカの「核の平和利用(Atom for Peace)」というスローガンに追従

11 津島祐子インタビュー「『ヤマネコ・ドーム』——隠された戦後をたどり直す」『群像』2013年7月号、182頁。

12 木村朗子『震災後文学論——新しい日本文学のために』青土社、2013年、220-235頁。

し、原発大国になった¹³。その意味で、福島原発事故は、旧日本軍勢力の残余、日米安保、原子力村、沖縄や原発立地の内国植民地化など、日本の「戦後」に隠蔽された様々な暗黒部を暴いた。さらに、日本の「戦後」を大きく規定した、世界の「戦後」のあり方をも問題化した。アメリカの原爆投下による第二次世界大戦の終結、冷戦下で核兵器などの軍事競争と原発国策の相互補完、原発をめぐる国内や海外の差別、原発テクノロジーや産業の海外輸出など、密接に絡み合った戦後の世界における力関係、利権、軍国主義など。

『ヤマネコ・ドーム』では、死んだター坊の泣き声は、トラウマの傷の音 (the voice of the wound) として、原発事故の放射能のイメージにダブらせられる。

小バエの羽音と重なって、すすり泣きの声が、天井からも聞こえてくる。畳の下からも、壁からもひびいてくる。ああ、これはター坊の泣き声だ。ター坊が死んでも、出口を奪われた泣き声は消えない。ター坊の泣き声とお母さんの泣き声がここには降り積もり、染みこみ、煮こごりの闇は長い時間を越えたすすり泣きの声で閉ざされている。¹⁴

放射能が封じ込められたニット・ドームのように、「煮こごりの闇」として表現される日本の戦後は、原爆、敗戦の記憶を封じ込めるかたちで、原発の国策を推進した。島の原発事故で、世界中で核の軍事や「平和」利用によってトラウマを負った者の傷の音など封印されたものは、漏れてくる。

ター坊母子の「その後」は、生き残ったことの苦しみを表現する。トラウマは、直接的に死に関わるものではなく、暴力の現場において、またそれを越えた場所で、「死に近接」しサバイバルした主体に関するものである¹⁵。小説の中で、ター坊の母は、ミキちゃんを始め、殺された女性のためにかまぼこの板で位牌をこしらえ、お経を唱える。犯行の後に石になった時を除いて、ター坊をも隣に座らせる。震災による津波や原発事故の話聞いたター坊の母は、津波に吞まれて死んだ人たちのことを考えて、以前に息子に言ったことを思い出す。「こうして生きているほうがよっぽど苦しい」と。

生きているあいだは、時間の流れから逃れることができない。でも、その流れの外側には、死んだひとたちが静かに揺らぎながらたたずみ、時間に流されていくひとたちをまばたきもせず見つめている。死んだひとの眼に流れはとても急なのに、それでいてなにも動かない。流れの外に立つ死者の数はどんどん増えていく。

13 山岡淳一郎『原発と権力』ちくま新書、2011年。

14 津島祐子『ヤマネコ・ドーム』講談社、2013年、323-324頁。

15 Michael Rothberg, "Beyond Tancred and Clorinda — Trauma Studies for Implicated Subject," in *The Future of Trauma Theory* (London and New York: Routledge), 2014, xiv.

老母と息子はいつもふたりで、その数をかぞえていた。¹⁶

ター坊の母は関東大震災、第二次世界大戦、福竜丸事件、そして東日本大震災と福島原発事故を経験した。時間の流れの中で、様々な自然の災難や人為の暴力が繰り返り起こり、たくさんの命を奪っていった。生き残った者は、暴力が反復される時間の流れから逃れることができないし、死者たちが外側から、生き残った自分たちを「みつめている」視線を意識し続ける。

『ヤマネコ・ドーム』には、原爆、核実験、原発事故といった「核」の継続された暴力への反省や批判が込められる。トラウマとして繰り返される暴力の中に生きながら、死者への倫理の債務を負われる生き残った人々の苦しみを可視化し、「核」の時代に生きる人間の倫理的義務を問うのだ。

3. 生き残った者の倫理的義務——オキナワとフクシマからの問い

沖縄においては米軍基地が建設され、いまでも定着する。原爆を受けた日本本土は原発大国になって、軍国主義的な欲望を持続する。空間やメカニズムを異にする二つの暴力は、並行的に進行した出来事であるだけではなく、互いに補うかたちでアメリカの冷戦秩序に組み込まれた日本の「戦後」を形づくった。

アガンベンは『残りの時』で、国家権力による直線的な、クロニクル的な時間に、過去、現在、未来がお互いに交錯し置き換えられるというメシア的な時間を対置する¹⁷。二つの小説では、意識の流れ、おぼろげな記憶の断片、夢、幻覚などを、独り言、話しかけの形式をとおして、繰り返し現在に侵入し、今に持続する暴力へ繋がっていくようなトラウマを表現する。トラウマの遅延性、反復性、侵入性や再演性によって、過去と現在、生者と死者、想像と現実の境界が溶解し、二つの世界がお互いに浸透する。そのようなトラウマ的な時間は、メシア的な時間として、核兵器と原発を中心に進められてきた終戦、冷戦、ポスト冷戦といった直線的な歴史を攪乱する。だが、トラウマ的時間を現前させるこのような試みは、トラウマを歴史的な語りやその直線的な時間性に取り入れるのではなく、「トラウマを画定し、その現前自体を標示すること、私たちの象徴の世界の中心にある空白、欠如や過剰を認知すること」である¹⁸。二つの小説とも、被害者が女性であることは偶然ではない。国家間の軍事競争と地元の家父長制は競合しながら共犯関係を結び、人種差別と性差別をお互いに増幅させるかたちで、男らしさを構築してきた。『眼の奥の森』では、アメリカ兵によって去勢された沖縄の男性は、家父長制をとおして、地元の女性に重層的な暴力を加える。『ヤマネコ・ドーム』の、GI孤

16 津島祐子『ヤマネコ・ドーム』、30-31頁。

17 ジョルジョ・アガンベン『残りの時——パウロ講義』上村忠男訳、岩波書店、2005年。

18 Jenny Edkins, "Time, Personhood, Politics," in *The Future of Trauma Theory*, p133.

児を収容した施設や、ヨン子やター坊の母子家庭などは、女性と子供による家庭ばかりである。「父」の不在は、「平和天皇制」という「空白」を中心に据えたがゆえに、「責任の不在」というメカニズムが生み出された戦後日本の構造を象徴的に表現する。

『眼の奥の森』では、加害者の米兵やその子孫たちは、アメリカの海外における軍事活動でトラウマを負ったり、命を落としたりする。イジメの問題は、沖縄だけではなく、90年代以降の日本全国で大きな社会問題になった。アメリカを始め、戦後の各国の軍国主義は、集団的な暴力を「正義」「平和」「自衛」の大義名分で正当化し、暴力や差別に満ちた世界像を作り上げた結果なのだ。『ヤマネコ・ドーム』では、GIベイビーの話を福島原発事故に繋げていくことで、アメリカ軍国主義の暴力が、沖縄だけではなく、米軍占領期が終わった後でも、日米安保のかたちで日本全体を支配したことを象徴的に表現した。殺人事件が起きるたびに、登場人物のカズとミッチ、ヨン子は、殺したのは自分かもしれないという恐怖に取りつかれる。さらに、この小説は、福島原発事故による放射能が東京の水、植物、昆虫、動物、土壌などを汚染したことから書き出し、原爆がヒロシマに落とされて以来、核実験、原発による被害が時間と空間を超えて、地球上のすべての「生命」全体に及んだことを思い出させる。

その意味では、二つの小説におけるトラウマをめぐる表象は、生き残った者の倫理的義務という問題を提起する。マイケル・ロスバークは、トラウマに関わる搾取や暴力の問題は、「関与する主体 (implicated subject)」という歴史的な主体から捉えられるべきだと主張する。彼の定義する「関与する主体」とは、「加害者でも被害者でもないが、そのどちらでもありうる者」である。また、「多種多様で等質ではないトラウマと幸福の経験を同時に生み出す、一つのシステムの受益者 (Beneficiaries of a system that generates dispersed and uneven experiences of trauma and wellbeing simultaneously)」である¹⁹。この「関与する主体」は、加害者と被害者の二項対立的な関係を超越するような歴史的な主体を指すが、それは加害者と被害者を区別しないことを意味するのではない。人間が搾取や暴力を生み出すシステムに組みこまれている以上、倫理的義務が背負われてしまうことを主張するものなのだ。だが、ここで問題化しなければならないのは、「幸福 (wellbeing)」や、システムの「受益者 (beneficiaries)」などの概念なのだ。沖縄の米軍基地が日本を守り、原発が経済の発展を支えるなど、トラウマを生み出した搾取や暴力を、「幸福」や「利益」をもたらすものとして正当化するレトリックにほかならないのだ。福島原発事故から四年が過ぎた2015年、8月に九州電力川内原発が再稼働し、9月に平和安全法制が成立した。ポスト3・11の日本や世界に生きる人間は、発展、安全、平和、正義、幸福などのレトリックで正当化されつづけていく「核」をめぐる軍事—資本主義の暴力に対して、「幸福」や「利益」の意味を問い直しながら、自分がいかなる形でそれに加担したのかを反省し、行動を取るという倫理的な義務を果たさなくてはならないのだ。

19 Michael Rothberg, "Beyond Tancred and Clorinda," xv.